

先行研究のレビューを通じたいじめの発生要因の整理 —個人要因・関係性要因・環境要因の観点から—

日野陽平 (加藤学園高等学校)

キーワード: いじめ, 発生要因, レビュー

問題と目的

いじめは、被害児童生徒の希死念慮を引き起こしうる (伊藤, 2017)。また、教員が認知し対応できているのは実際に発生しているいじめの一部であり、認知漏れ・対応漏れが多数生じている (加藤・太田・水野, 2016)。これらのことは、いじめ予防の必要性を示唆している。

いじめは、様々な個人要因 (加害児童生徒の心理・認識・スキル)、関係性要因 (児童生徒間および教員等と児童生徒との関係性)、環境要因 (児童生徒を取り巻く人々の言動や児童生徒が所属する集団・環境の性質) によって発生する現象であると考えられる。この観点からいじめの発生機序を整理すると、次のように類型化できると考えられる。

a. (関係性要因や環境要因に影響を受けた) 個人要因が原因となり発生する, b. (個人要因や環境要因に影響を受けた) 関係性要因が原因となり発生する, c. (個人要因や関係性要因に影響を受けた) 環境要因が原因となり発生する, d. (環境要因に影響を受けた) 個人要因と関係性要因の相互作用が原因となり発生する, e. (関係性要因に影響を受けた) 個人要因と環境要因の相互作用が原因となり発生する, f. (個人要因に影響を受けた) 関係性要因と環境要因の相互作用が原因となり発生する, g. 個人要因・関係性要因・環境要因の相互作用が原因となり発生する。

以上の議論を踏まえれば、いじめを発生させる個人要因・関係性要因・環境要因に着目し、それらの発生要因にアプローチすることでいじめを予防するという方法が考えられる。ただ、このようないじめ予防方法を検討・開発するためには、まずいじめの個人要因・関係性要因・環境要因を把握する必要がある。そこで本研究では、いじめの発生要因についての先行研究のレビューを行い、個人要因・関係性要因・環境要因の観点から発生要因を整理することを目的とする。

方 法

本研究においてレビューの対象となった先行研究の抽出は、次の三段階のプロセスによって行われた。なお、いじめの発生要因を包括的に整理するため、先行研究の抽出にあたって研究手法については不問とし、実証研究のみならず理論研究も分析対象に含めた。

まず、いじめの要因等についてレビューしている下田 (2014) と日野・林・佐野 (2019) において引用されている論文および図書のうち、いじめの発生要因が検討されている論文および図書を対象とした。次に、CiNii Articles を活用し、「いじめ 要因」「いじめ 原因」を検索語句としたフリーワード論文検索でヒットした論文 (2020年3月1日時点) のうち、いじめの発生要因が検討されている論文を対象とした。最後に、ここまでのプロセスで抽出されなかったものの、いじめの発生要因が検討されている論文および図書を補足的に追加し、対象とした。

結果と考察

先行研究のレビューにより、14個の個人要因、3個の関係性要因、8個の環境要因が抽出された。抽出された要因を以下に整理して提示する。なお、要因列挙の順番は、各要因の先行研究の年代順 (一つの要因に複数先行研究がある場合は、最も古い先行研究の年代順) とした。

個人要因として、①対人関係形成スキルの不足 (小宮山, 1986)、②いじめ加害行動を正当化する心理 (久保田, 2003a)、③学級成員のいじめ否定規範意識を低く見積もること (大西, 2007; 大西・黒川・吉田, 2009; 大西・吉田, 2010)、④異質性を見出し他者を排除する心理 (松下, 2008)、⑤教員が不適切な権力を行使しているという認識 (大西・黒川・吉田, 2009)、⑥被害者の苦痛を実際より軽く見積もること (堀出・原, 2010)、⑦スケープゴートを作りグループ内の仲間意識を強めようとする心理 (堀出・原, 2010; 伊藤, 2011)、⑧集団内の暗黙の合意・規範から逸脱した他者への制裁意識 (森田, 2010)、⑨共感性の不足 (大西・吉田, 2010)、⑩攻撃行動をいじめだと認識しないこと (谷口, 2010; 下田, 2018)、⑪いじめ否定個人規範の弱さ (中村・越川, 2014)、⑫加害行動が発見され罰せられるという予測をしないこと (江川, 2017)、⑬他者のマイノリティな部分を見出しステイグマを付与する心理 (小南, 2017)、⑭向社会的スキルの不足 (川畑・池田・山下・村上・木村, 2018) が抽出された。

関係性要因として、①児童生徒間の協力体制の未確立 (久保田, 2003b)、②児童生徒と教員との関係が悪いこと (加藤, 2010)、③児童生徒間におけるパワー資源の偏在による力関係のアンバランス (森田, 2010) が抽出された。

環境要因として、①保護者の不適切な養育態度 (小宮山・難波, 1988; 小宮山・難波, 1989)、②所属集団内に傍観者が多いこと (森田, 1990; 正高, 1998)、③いじめを許容したり傍観したりする空気 (竹川, 1993)、④閉鎖性の強い空間 (内藤, 2001; 田原, 2007; 田中, 2009; 有馬, 2013)、⑤教員による管理・監督が行き届かない空間 (竹川, 2006)、⑥いじめ否定学級規範の弱さ (大西, 2007; 大西・黒川・吉田, 2009)、⑦所属集団内の同調圧力 (松下, 2010; 杉森, 2013)、⑧教員の不適切な言動 (森田, 2010) が抽出された。

本研究では、個人要因・関係性要因・環境要因という観点からいじめの発生要因を整理した。これは、発生要因にアプローチするいじめ予防方法の検討・開発に向けた基礎的知見になり得る。一方、今後の課題として次の二点があげられる。

一点目に、整理された各要因の、いじめ発生への影響力の大きさ (効果量) を検討することが求められる。二点目に、整理された個人要因・関係性要因・環境要因に包括的にアプローチするいじめ予防方法やいじめ予防プログラムを検討・開発することが求められる。これらの課題にアプローチする研究が生まれ、いじめ予防に向けた知見がさらに蓄積されていくことを期待したい。